

みつわ会福島県会員の集い

平成24年11月4日（日） 於 うまいもの^{あすまさりょう}東茶寮 福島店（福島市東中央）



（後列）左から 佐藤賢一、鈴木久教、清和才二、佐藤友彦、大久保和彦、菊池武史
（前列）左から 涌井進、美馬五郎、浅野脩、徳江正春、五十嵐紀生 （11名）

福島県会員の集いは県内在住の5名の会員が出席して、皆で11名の会員が参加しました。体調の関係でこの数年、みつわ会の年次総会も欠席されていた浅野、徳江兩大先輩も地元開催ということで、久しぶりのみつわ会の集まりへの参加となりました。浅野さん（昭和24年入社）は日新火災（昭和18年3社統合合併し現社名）のほぼ前半期を過ごされてきました。話題の中心はその時代、「昭和」に逆戻りです。そのとき、皆それぞれ、自分がどんなことをしていたのか懐古している、そんな「古き良き時代の会社生活」に浸った飲み会でした。こういった集まりこそ、「みつわ会」の原点なんだと感じるような集いでした。

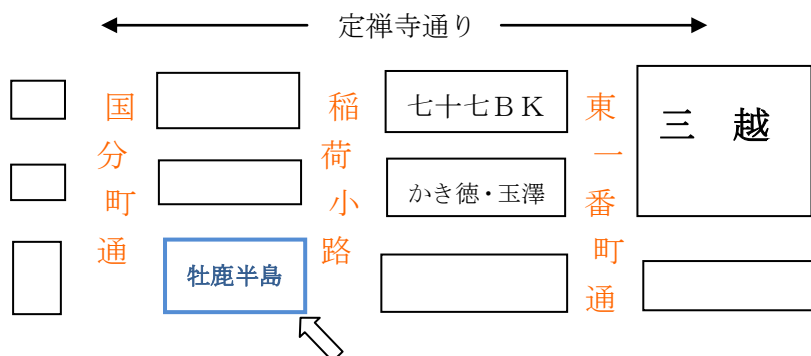
—※※※※—

訃報

去る 10月24日 山家 正由様（66歳）がご逝去されました。
心からお悔み申し上げますと共にご冥福をお祈りいたします。

24年度忘年会のお知らせ

日時 : 平成24年12月11日(火) 午後 5時～
 会場 : 串焼と郷土料理・牡鹿半島 (入口は稲荷小路側から)
 青葉区国分町2-10-21 TEL 022-261-1385
 会費 : 5,000円



11月6日幹事会・・・報告

①11月4日実施「福島県会員の集い」報告。②山家正由さんの葬儀関連について会としての検証と今後の確認を行った。③「女性の集い」1月～2月開催に向けて11月中、女性会員に事前アンケート実施。④12月11日忘年会、確定。以上

12月の行事

	支部	みちのく損保
12月 4日(火)		料理教室
12月 7日(金)		幹事会・忘年会
12月11日(火)	4時～幹事会。 5時～24年度忘年会	

※12/11忘年会の出席は12月4日(火)中に佐藤賢一さんまで連絡願います。

大矢さんの絵

「ドイツ・オーストリア」シリーズの第2回作品です。今回も、ドイツの古き良き時代の面影を残す“中世の宝石箱”ローテンブルグです。城壁内の東側に位置するブルク公園より、タウバー溪谷をはさんだ南側の城壁内の街並みを入れて描きました。朝霧の中、新緑の美しい光景でした。 <大矢>



<随想>

酒田大火

千葉繁明

心地よい春の風が、初めて酒田の街に降り立った私を優しく包み込んでくれたのは1976年(昭和51年)の春であった。もう36年も前のことである。4月の酒田は暖かく日和山公園の桜は満開であった。

最上川の河口、日本海の片隅に、昔から北前船による上方の文化、経済が開いた酒田は、隣の鶴岡と合わせて庄内という一つの独特の経済圏を築きあげてきた活気のある町である。県都より遠く、交通も不便なために、各社は庄内地方を一つの経済圏として酒田か鶴岡に出先を置いていた。私が就職した損害保険会社も酒田に営業所を置き、私は新米の所長として赴任したのである。この年の、秋も深まった10月29日は私には忘れる事の出来ない日となった。その日、酒田の町は鉛色の雲に覆われて日本海の晩秋特有の底鳴りする突風が、細かい雨をともなって港町を吹き抜けていた。田舎の町は夜の訪れが早く夕方になると街全体がひっそりした気配に包まれる。夕方5時過ぎに地元の古老が事務所に飛び込んできて、「中町で火事だ、火がだいぶ広がっているようだ。火がこの強風にあおられて広がったらとんでもないことになる」というので屋上に出て見ると、中町上空に燃えさかる炎が新田川に向かう強風にあおられて空を焦がしている。「風が強い、これは大火事になるぞ」と、その古老は風が強い時は大火事になると昔から言い伝えられていると付け加えた。慌てて母店に一報を入れたのはいいが新米所長にはどうしてよいかわからない。

とに角、重要書類だけでも持ち出そうと、机の上にあるものを手当たり次第車に積み込んで事務所に鍵をかけて家に帰ったが、道すがら、街の中は折からの強い北西風に火の粉が次々と暴れまわり次から次へと燃え移った炎は店のシャッターを溶かして火炎放射器のようになって隣の店を飲み込んでいく。まさにこの世の地獄である。消防はホースで水をかけても強風で用をなさず呆然と立ち尽くしているだけである。当社の大口契約先のデパートも炎に包まれているのではないか。大火といってもせめて10軒位が焼けるものと高をくくっていた自分がだんだん情けなく恐ろしくなってきた。

家に帰ってテレビを見たらNHKの臨時ニュースが夜空を赤く焦がす酒田の町の様子を映し出している。その頃、電話もつながらない状況の中で、ニュースを見た母店や本社では夜を徹して契約先のリストアップや現地に送り込む要員の準備に追われていたのである。私が住んでいるところは街の中心から幾分離れているが燃え盛る炎が新井田川に向かう強風にあおられて火の粉がどんどん飛んでくるようになった。隣の家では家財を運びだし始めたが、茫然自失の私には自分の家財はどうでもよく焼けたら諦めようと何もしなかった。ただし子供たちのランドセルや当面の衣類、食料だけは車に積んで家が燃え移ったらすぐに逃げ出せるようにエンジンをかけておいた。子供たちには洋服を着せたまま寝かせて置き、二階の窓から火の粉が飛んでくる夜空をまんじりともせずじっと見続けていた。

明日からどうしたらよいのだろうと不安が増すばかりである。その頃仙台の妻の両親は連絡が取れない不安から、夜を徹して車を走らせ酒田に向かっていたという。

自衛隊による破壊活動により炎が収まったのは明け方近くになってからである。

夕刻発生した酒田大火は、焼失家屋1774棟、負傷者1003人、死者1人(消防士)、罹災者3003人もの被害を出し翌30日午前5時ようやく鎮火したのである。

瞬間風速26メートルの強風にあおられて、炎は市街の中心部を嘗めるように焼き付くし、新井田川に至る約22.5ヘクタールの市街地が灰燼に帰した焼失面積で戦後4番目の大火となったのである。

一夜明けて幸い焼けなかった事務所はてんやわんやである。母店や本社から損害調査の担当者が大挙して駆けつけて狭い事務所は足の踏み場もない。とりあえず皆が泊まる旅館を確保してから代理店や契約先の被害状況を確認し始めたが、大火の原因が「グリーンハウス」という映画館の漏電であるというではないか。私が酒田に来てまもなく観たい映画があるので入った映画館が「グリーンハウス」である。小さい映画館なのに、中はじゅうたんが敷き詰められ座席はゆったりとその豪華さにはこれが映画館かと目を見張った映画館である。余談であるが、かつて、映画館のその場所には稲荷神社があったが、稲荷神社が壊された後、建物が建て替えられるたびに小さな火事があり、そしてついに街を焼き尽くす大火が発生したのである。「稲荷神社の祟りと」人々は囁いているが、因縁というものは恐ろしいものである。日生劇場にも負けない日本一といわれた映画館を地方都市の酒田に造ったこの人は、日本海の食材をふんだんに使って、これも日本一のフランス料理店といわれたレストラン「ルポットフー」を酒田に作ったのである。この店には、私も家族を連れてよく行ったがその味はまさに日本一であった。今になれば懐かしい思い出のフランス料理店である。世の常とは面白いものである。

酒田に住んだのは大火の年とその翌年の2年間だけであるが、焼ける前の酒田の町は静かな美しい町であった。日本海に沈む夕日の美しさにただ呆然と見とれていたものである。初めて口にする山海の珍味、特に新鮮な甘海老、アワビ、天然の岩牡蠣、もつてのほかという菊の花、等、そんな中で真冬に獲れる寒鱈の料理は最高であった。あの「きく」という真っ白な鱈からとれる白子の刺身は生まれて初めて口にした珍味である。

酒田に住んだ当初、独特の上方訛りの庄内弁には私も妻も苦勞したものである。妻は買い物に行っても言葉が通じず小学生の娘が通訳してしのいでいたのも懐かしい思い出である。美しい夕日を見てから行きつけの小料理店で飲む「初孫」の味は今でも忘れられない。

家財は焼けても仕方ないとあきらめていたが、妻は自分の着物だけは持ち出したいと箆笥から取り出して車に積み込んでいたのも今になれば懐かしい笑い話である。

「ゆく川の流れば絶えずして、しかももとの水にあらず。」

我が国の歴史の中には、戦乱、天地異変、疫病、飢餓、火事など人々が無常の世界にさまようことのなんと多いことだろう。人生の葛藤と世の無常をいやというほど思い知らされた鴨長明は方一丈の草庵に出家遁世して平家の都落ちから鎌倉武家の台頭までを見届け「方丈記」という文学に残している。私の人生には幾度となく大きな災害がのしかかつては過ぎ去っていく。人生は無常である。

平成24年10月1日